

本日ここに、〇〇株式会社、故〇〇〇社長の社葬を取り行うに当たりまして、心より哀悼の言葉を捧げます。

人生は「白駒の隙を過ぐるがごとし」と申しますが、百歳の齢をも期すべき有為の人は、余りにも蒼惶としてわれわれの前から去ってしまいました。

私事にわたってまことに恐縮ではありますが、〇〇氏は私にとりまして、旧制高等学校及び大学の先輩にあたります。かえりみますると、私が当社の只今の位置にありまするのは、ひとえに〇〇氏の牽引力によるものであったと、改めて深い感慨にふけらずにはいられないのであります。

学生時代は私などと比べますと、年の差より遙かに老成した、物静かな学究肌といふべきお人柄でありました。はからずも後日、氏の身辺近くにあつて共に仕事をされるようになり、氏の実行力に富んだ経営手腕を目のあたりにするようになりました。

然うして、私の氏への心酔の度合は、更に深まったのであります。

氏は、この〇〇株式会社の草創期に入社されました。戦後間もない混乱期で、その日の暮らしを支えるのがやっとという人々に、新しい文化の息吹を与えようとする分野の仕事がいかに困難であつたか想像に余りありません。

氏が、営業担当重役になられたのは、あのオイルショックの年でありました。ほとんどがアイディアだけで勝負というこの業界にあつて、じっくりと長期の路線を敷いて真に社会が求めるものは何かということから、常に目を離されなかつた氏の方針は、いかなる時代に於ても拳拳服膺すべきであることを肝に銘じております。〇氏は社長就任より〇〇年、今、脂の乗切つてきた時期でありました。全てが社長を軸として回転しておりました。しかし今われわれは社長の死という冷厳な事実の前に、何をなすべきか「嘆きに溺れている時ではない」という、社長の叱咤の声が聞こえるような気がいたします。これも会社が乗越えなければならぬ、ひとつの危機なのであります。

今まで戦い抜いてこられた社長の後継者たるには、その果敢さも受け継がなくてはなりません。その覚悟のほどを表明して、ご霊前に捧げる誓いとす次第であります。ご遺族の方々のお嘆きは、さぞやお慰めの言葉も有りませんが、殊にご高齢のご母堂さまの、ご胸中はいかばかりかと、察するだけに痛恨の極みであります。なにとぞご健康にはご留意なさいまして、いくぶんなりともご氣力をはやく取り戻されんことを、切に祈っております。

故人もさぞやお心に懸けられたことと存じますが、ご令孫方もりっぱにご成人になつて、いることでもございますので、ご一族のご繁栄を楽しみに、将来を見届けていただくために、なにとぞご自愛ください。

遂に〇〇氏との永訣の時がまいりました。芳欄枯るるをとどめ嘆きは、浮生の慣い、今はただ、氏の魂の安からんことを祈るのみであります。

平成〇年〇月〇日

〇〇〇〇株式会社

取締役福社長 〇〇〇〇